

国文法を楽しく学ぶための一試案

—動詞の活用の種類と活用形の指導を例に—

鈴木 容子

1. はじめに

「国文法」と聞くと、どのようなイメージを想起されるだろうか。おそらく「暗記しなければならない」、「用語が難しい」など、なかなか良いイメージが持たれにくい教科なのではないだろうか。実際に、山室（2006）が文法指導を行う中学校の現職の教員を対象に実施した質問紙調査によると、「文法指導の難しいと感じるところ」の自由記述欄には、次のような意見が目立ったという。

- ①学習者が持つ文法に対するマイナスイメージ
- ②学習時間の確保の難しさ
- ③品詞と文の成分の関係における混乱
- ④読解・表現活動とのギャップ
- ⑤実際の表現（日常生活の言語表現）とのギャップ（山室2006 p.78）

結果の①にもあるように、教師は「学習者は国文法に対してマイナスイメージを持っている」と感じているようである。

では、どのようにすれば国文法を楽しく学べるのだろうか。また、教師対学生という一方向的な指導だけではなく、学習者間での自発的な学び合いが起こるような活動はないのだろうか。

筆者は日頃、国語教育（日本語母語話者への日本語の教育）ではなく日本語教育（日本語非母語話者への日本語の教育）に従事しているのであるが、2009年7月より2010年3月まで、実践女子学園中学校に在籍する帰国子女学生を対象とした「日本語課外授業（以下「課外授業」と略記）」を行う機会を得た。本稿は、その際に「国文法学習への抵抗感を取り除き、理解を深めるにはどうしたらいいか」を考えて実践した内容の報告である。

(2)

2. 対象学生および課外授業の内容について

本報告の対象となる学習者は、2009年度に実践女子学園中学校1年次に在籍していた帰国子女学生のうちの7名である。それぞれ2年から8年ほど海外（アメリカ、ドイツ、イタリア、カタール、台湾）で生活したのちに帰国し、当校に入学したという背景を持っている。日本語を話すこと自体に問題はなく、知識も海外でしっかりと学んできているのであるが、学習スタイルの違い（例「試験の出題の方法」）や、日常会話ではなかなか耳にしない教科書に出てくる用語や言い回しに慣れず、特定の教科を困難に感じているということであった。

初回の授業で、7名に対し、学習についての聞き取り調査を行った。その結果を整理すると、苦手だ、難しいと感じる教科については全員（7名）が「国語」と回答し、あとは「理科」（3名）、「社会」（2名）、「数学」（2名）であった。具体的にどんなことを難しいと感じるのかについては、国語は「国文法と漢字」、「文章を読んで理解するのが難しい」という意見が、理科は「教師が話す内容は分かるが、テキストに書かれていることが難しい」、社会は「教科書に書いてある文の中で、1つでも分からない言葉があると、他も分からなくなってしまう」、等の意見が出た。

これら全ての問題点を解決するための授業の達成目標としては、「全ての教科で使われている教科書に出てくる日本語で書かれた文章を、無理なく読めるようにする」ということが考えられるが、1週間に1コマ（50分）しか時間を取ることができないこと、個人によって苦手な教科が異なることも考慮しなければならなかった。そこで、課外授業では全員が苦手だと感じている国語科目、中でも特に困難に感じている「国文法」を扱うことにした。本稿では、国文法の学習項目のうち、後期（10月から3月）の主要な学習項目であった「動詞の活用の種類と活用形」を理解させるための試みを報告する。

3. 教科書の記述および練習問題の傾向

3.1 教科書の記述

まず、学習者が普段授業で使用している教科書（『国文法ワークブック』（東京書籍）、以下「ワーク」と略記）において、動詞の活用の種類と活用形がどのように説明されているかについて見ておく。

教科書では、動詞は3回に分けて扱われている。第1回目は活用形（未然形、連体形など）についての説明や、動詞の活用形の見分け方について述べられている。たとえば未然形については、「まだ動作や状態などが実現していないことを表す形（p.30）」、動詞の活用形の見分け方については「動詞の後に続く言葉が、何形に続くのかを覚えておく（p.31）」という説明があり、例として「知らない」の活用形は「「ない」は未然形に続く→「知る」の未然形（p.31）」というように判定すると説明されている。

第2回目は「活用の種類(1)」であり、学習項目は五段活用、上一段活用、下一段活用とその見分け方についてである¹⁾。五段活用と一段活用の見分け方については、「動詞に「ない」をつけて、「ない」のすぐ上の音が、五十音図の「ア・イ・エ」のどの段になるか。（p.33）」と説明されている。また、ここでは音便（イ音便・撥音便・促音便）についての記述もあり、「発音しやすく音に変化したもの（p.32）」と説明され、それぞれの音便の例が示されている²⁾。

第3回目は「活用の種類(2)」であり、カ行変格活用とサ行変格活用、自動詞と他動詞、可能動詞、補助動詞（形式動詞）についての説明がある。

3.2 練習問題の傾向

ここでは、先に見た動詞の学習項目のうち、「自動詞と他動詞」、「可能動詞」、「補助動詞（形式動詞）」以外のものについて検討する。

練習問題は全部で11問ある。その中で最も多かったのは「指定された動詞の活用の種類や活用形を選択肢の中から選ばせたり、書かせたりするもの」（＝(イ)、(ロ)）であった。その他、「活用表を完成させるもの」、「文に出てくる動詞を終止形に直すもの」（＝(ハ)）、「当該動詞の語幹を答えさせるもの」、「文章の中から動詞を見つけさせるもの」があった。

(イ)明日は出かけるので、早く起きよう。

ア 未然形 イ 連用形 ウ 終止形 エ 連体形 オ 仮定形 カ 命令形
（「ワーク」p.31）

(ロ)例にならって、次の（ ）の中をうめなさい。

喜ぶ（ ）行（ ）活用（「ワーク」p.33）

(ハ)次の文には3つの動詞がふくまれています。その動詞に____を引き、言いさりの形（終止形）を書きなさい。

「百科事典で調べて、それでも分からなければ、先輩にたずねればよい。」

（「ワーク」p.31）

このように、国文法の教科書における練習問題は、「まず指定された動詞（動

(4)

詞文)があり、それについて活用の種類や活用形を答えさせる」というタイプが多い。

3.3 問題意識

教科書における練習問題は、まず「あらかじめ指定された動詞があり」、次に「その活用形を答えさせる」という練習になっていることを見た。試験における問われ方も同様であり、また、今後古典文法を学ぶ際にも、特定の動詞の活用の種類や活用形が分かることで正しい意味がつかめるため、妥当な練習方法であると言えるだろう³⁾。

しかしこのような練習方法だけでは、全ての学習者が正しく理解しているのか、知識を正しく整理できているかどうかは分からない。たとえば、学習者の頭の中では「終止形」はどのように理解されているのであろうか。教科書には「言い切るときの形」と説明されているが、「書いた。」(連用形)や「行こう。」(未然形)も終止形であると誤解してしまうということはないのだろうか。

さらに、教科書にある練習問題のような練習では、学習者同士の学び合いは起こりにくく、どうしても「教師から学習者へ」という一方向的な授業になりがちだという問題点もある。もちろん、書いた答えをお互いにチェックし合うというような活動は考えられるが、そこには「相手に説明しなければならない」という強い動機は存在しない。「相手に説明しなければならない」という強い動機を起こさせる活動を行えば、学習者同士の学び合いが起こり、その結果、既習事項に対する理解が深まるのではないだろうか。

そこで、授業実践の中で、従来通りの「指定された動詞の活用の種類や活用形を答える」という学習に加えて、その逆方向からの練習である「特定の活用の種類や活用形に相当するものを、複数の動詞の中から選ぶ」という練習を、カルタのようなゲーム方式で取り入れることを試みた。なお、本稿は「動詞の活用の種類と活用形を教えるべきか」という問題や、国文法を学ぶ意義についての議論には立ち入らない。動詞の活用の種類と活用形を理解させなければならないということを前提に、どのような方法をとれば理解が促進されるかにについて考えるものである。

4. 「動詞の活用カルタ」の実践報告

4.1 動詞の活用カルタとは

動詞の活用カルタとは、教師が指定した活用の種類や活用形に相当するものを、学習者が複数のカードの中から選び出すという、カルタ取りゲームに似た学習方法である。

動詞の活用カルタの特徴と期待される効果としては、次の3点があげられる。まず、「遊びという要素を取り入れて学ぶこと」により、国文学習への抵抗感をやわらげることができる。また、「特定の活用の種類や活用形に相当するものを、複数の動詞の中から選ぶ」というタイプの活動をすることにより、活用の種類や活用形の識別がより明らかになる。さらに、「学習者間での学び合いの過程があること」により、自分の理解を咀嚼して相手に伝え、その結果、学習項目に対する理解が深まるということも考えられる。

カルタを作るには、まずカルタにのせるターゲット例文を決める必要がある。ターゲット例文を選ぶ際には「活用の種類（五段活用など）と活用形（未然形など）に偏りがなく」と「学習した項目が網羅されていること（例：音便も含める等）」と「学習者にとって身近な例文であること」に留意したほうがよい。

なお、今回の授業で用いた20例は以下のとおりである

【五段活用】

- (1)カ行五段活用未然形（沖繩に行こう）
- (2)カ行五段活用連用形（手紙を書いて）
- (3)サ行五段活用連用形（友達と話して）
- (4)タ行五段活用假定形（10分待てば）
- (5)ナ行五段活用連用形（色を塗って）
- (6)マ行五段活用連用形（ジュースを飲んだ）
- (7)ラ行五段活用未然形（料理を作ろう）
- (8)ラ行五段活用連用形（雨が降ります）

【上一段活用】

- (9)カ行上一段活用假定形（コートを着れば）
- (10)カ行上一段活用未然形（なかなか起きない）
- (11)マ行上一段活用未然形（TVを見ない）

(6)

【下一段活用】

- (12)ア行下一段活用連体形（漢字を覚えること）
- (13)ア行下一段活用命令形（早く覚えろ）
- (14)ナ行下一段活用終止形（11時に寝る）
- (15)バ行下一段活用終止形（ごはんを食べる）

【サ行変格活用】

- (16)サ行変格活用未然形（そうじをさせる）
- (17)サ行変格活用連用形（コピーします）
- (18)サ行変格活用命令形（勉強しろ）

【カ行変格活用】

- (19)カ行変格活用連用形（明日も来ます）
- (20)カ行変格活用連体形（学校に来る時）

4. 2 実施方法

4. 2. 1 実施の流れ

まず、ここでは実施の大きな流れを示す。なお、50分授業における時間配分は、①（復習）に20分、②～④（活動）に30分をあてた。

- ①教科書で学習済みの「活用の種類」、「音便」、「活用形」について復習をする。
- ②2人（3人）1組にし、1ペア（グループ）ごとにカルタを1セット配る。カルタは文字の面を上にして、机の上に並べさせる。
- ③教師が出題し、学習者はそれに相当する札を取る。出題の内容は、「活用の種類（例：カ行変格活用）」、「音便」、「活用形（例：終止形）」などである。詳細は4. 2. 2で述べる。
- ④札を取ったら、ペアあるいはグループの仲間で正しいかどうかを確認し合い、教師に報告する。全員が正答であった場合は、答えを確認したら次の設問に移る。正しい札が取れなかったペア（グループ）がいる場合は、できた人に説明をしてもらったり、教師が板書などを用いて解説する。詳細は4. 2. 3で述べる。

4. 2. 2 出題の方法

活動は合計2回行った。1回目の活動で「活用の種類」と「音便」について、2回目の活動で「活用形」について出題した。

1回目の活動では、まず、教師が「カ行変格活用を取ってください」と言う。

学習者は、20枚のカルタの中からカ行変格活用のもを探して、その札を取る。出題する活用の種類は、活用の種類の判定が容易なものから徐々に難しいものへとしていくと良い⁴⁾。たとえば、1題目で「五段活用」を出題してしまうと、枚数も多く選ぶのに時間がかかるため、活動のテンポを作りにくい。はじめは、「来る」だけが相当する「カ行変格活用」や「する」だけが相当する「サ行変格活用」を出題するほうが、学習者の活動へのモチベーションも保たれるのではないかと思う。なお、今回の授業では「カ行変格活用」→「サ行変格活用」→「上一段活用」→「下一段活用」という順に出題した。

さて、「下一段活用」まで出題し終えた時点で、机の上には「五段活用」の札（8枚）のみが残っているのであるが、この状態で「音便」についての出題を行った。正解は、(2)「書いて」、(5)「塗って」、(6)「飲んだ」の3枚である。「音便になっているものを取って下さい」と言ったのであるが、どれが「音便」に相当するのか、8枚の中から探すのが難しそうなおペアもあった。そこでヒントとして、クラス全体に対してイ音便、撥音便、促音便の類例を出して確認した。問題なく探し当てられたペアには、個別に見て回り、音便の種類を答えてもらうようにした。ここまでが終了すると、机の上には音便のない五段活用の札が5枚残っている状態になる。1回目の活動はこれで終わりとし、誰が一番たくさん持っているかを報告してもらう。報告が終わったら、全ての札を再度机の上に並べてもらう。

続いて、2回目の「活用形」の出題に入る。まず、教師が「命令形を取ってください」と言う。学習者は20枚のカルタの中から、活用の種類にかかわらず「命令形」であるものを判別して、その札を取る。活用形の出題についても、判別が容易なものから出題していくのが望ましい⁵⁾。今回の授業では、「命令形」→「仮定形」→「終止形」→「連体形」の順に出題した。

さて、「連体形」まで出題を終えた時点で、机の上には「未然形」と「連用形」の札が12枚残っている状態になる。未然形は5枚、連用形は7枚あるが、ここではどちらかだけを取らせるということはずせず、ペアあるいはグループで協力して「未然形と連用形に正しく分ける」という活動にして、どのペアが早く正確に分けられたかを競うことにした。

途中のフィードバックなどを含めて、上記の2回の活動で30分かかったが、進捗状況によっては3回目の活動として、再度20枚を机の上に並べ、教師が「行、活用の種類、活用形（例：ナ行下一段活用終止形）」を言い、それに該当する札だけを1枚取らせるという活動もできるだろう。

(8)

4. 2. 3 正解の確認方法

では、「選んだ札が正しいかどうか」についての確認はどのように行えばよいのだろうか。正解の確認方法としては、大きく分けて「学習者間で正解を確認する方法」と「教師が正解を確認する方法」がある。

まず、学習者間で正解を確認する方法であるが、これはペアあるいはグループ間で、取られた札が正しいかどうかをお互いに確認し合うという方法である。自信のない場合は、教科書を見て確認しても良いとした。すでに理解をしている学習者にとっては、相手に対して声に出して説明することによって理解が深まり、理解が不十分だった学習者にとっては、何度も繰り返し説明を聞くことにより、理解が促進される。また、ペアではなくグループで活動を行った際は、1つの項目について、複数の人から異なる表現で説明を受けるということも有効であると考えられる。

しかし、学習者間で正しい判断ができない場合もある。そのような場合には、教師と学習者の間での意見交換により正解を確認しなければならない。確認の方法としては、まず暗示的な方法で、次に明示的な方法で正解を確認していくことが望ましい。暗示的な方法というのは、「正しい札は全部で～枚あります」というように、正解の枚数を伝える方法や、学習者が取った札に対して「この中に正しくない札が1枚だけあります」と伝える方法である。これにより、再度学習者自身に考えさせて、間違いに気付かせる。それでもなかなか間違いに気付けない場合には、明示的な方法で理解させることが必要になる。明示的な方法というのは、理解している学習者に教室全体に向けて説明させたり、学習者に例を出させたりしながら、教師が板書を用いて説明していく方法である。

このように、学習者の理解の程度によって適切な方法を選択して、1つの設問を消化してから、次の質問に移っていく。

5. 学習者の反応

学習者は、ゲーム感覚で国文法を学ぶということで、意欲的に取り組んでいた。この活動を行った結果、特に効果的だったと思う点が2つある。

1点目は、学習者間の活発な学び合いが観察されたことである。ペアの相手あるいはグループの仲間が取った札が間違っていた時に、「なぜ違うのか」を説明したり、自分が取った札が正しいかどうか相手が判断できていない時に、

自分が選択した札の正しさを説明しながら活動に参加していた。通常の教室活動では、教師が学習者に指名して答えさせない限り、このようなことは起こりにくい。「カルタ」というゲーム性を持たせた学習にしたことにより、「なぜ正しいのか／違うのか」を相手に説明したいという気持ちが学習者の中に自然に発生したのであろう。

2点目は、教師側が学習者の意外な誤解を知ることができ、説明の盲点を認識できたということである。

たとえば、活用の種類についての出題をした際に「カ行変格活用を取ってください」と言ったところ、正解である⁽¹⁹⁾「明日も来ます」、⁽²⁰⁾「学校に来る時」以外に、⁽¹⁾「沖縄に行こう」を取ってしまう学習者が3名ほどいた。「なぜ「行こう」がカ行変格活用なのか？」と聞いたところ、「「来る」はカ行変格活用だから」という答えが返ってきた。その答えの意味がよくわからず、さらに質問を重ねていったところ、「「来る」と「行く」は意味的なイメージが似ている」という理由で「行こう」をカ行変格活用だと判断してしまったということが分かった。教師側は、カ行変格活用は「来る」のみだから簡単なはずだ、と認識しているが、ある学習者にとっては「来る」も「行く」も、「何かがどこかに移動する」という大きなイメージが似ていると感じたため、同じタイプの動詞であると考えてしまったのではないだろうか。活用の種類の見分け方は、意味的な側面で見分けるのではなく、形式的な側面に注目して見分けるということと、そもそも「来る」と「行く」はまったく別の動詞であることを認識させる必要があるだろう。

また、活用形についての出題をした際に「終止形を取ってください。」と言ったところ、正解である⁽¹⁴⁾「11時に寝る」、⁽¹⁵⁾「ごはんを食べる」以外にも、⁽¹⁾「沖縄に行こう」、⁽⁶⁾「ジュースを飲んだ」を選んだ学習者が数名いた。教師側は、「終止形と連体形は形が同じであるため、混同があるかもしれない」という予測を持っていたが、未然形や連用形を終止形と混同することはまったく予想していなかった。未然形や連用形を選んだ学習者に、なぜそれらを終止形だと考えたのかと聞いたところ、「文の終わりに「。」(句点)がつけられるから。」という答えが返ってきた。⁽¹⁾の「行こう」は未然形、⁽⁶⁾の「飲んだ」は連用形であるが、確かに「沖縄に行こう。」「ジュースを飲んだ。」と句点をつけて文末にすることができ、教科書における終止形の説明も「言い切るときの形 (p.30)」となっているため、学習者にとっては終止形に見えたのであろう。

このように考えると命令形 (⁽¹³⁾「早く覚えろ」、⁽¹⁸⁾「勉強しろ」) も終止形と

判断してしまう学習者もいそうなものだが、今回はすでに命令形は出題済みであったため、命令形と終止形の混同が起こるかどうかについては確認できなかった。予測としては「命令形」は意味的な側面からの名付けで分かりやすいため、終止形との混同は起こりにくいと考えられるが、これまでも見たように、学習者は教師が予想もつかないような整理の仕方をしている可能性があるため、断言はできない。

6. おわりに

本稿は、帰国子女学生を対象とした日本語課外授業において、理解が困難であった国文法の学習について「抵抗感を取り除き」、「理解を深める」ためにはどうしたらいいかという問題意識をもとに行った授業実践の1つを報告した。

「動詞の活用カルタ」を考案・実践したことにより観察されたのは、「とても楽しそうに学習していた」、「学習者同士の学び合いが自然に発生した」ということだった。カルタというゲーム性を取り入れたことにより、自然と「相手に説明しなければならぬ」という動機が生まれ、学習者同士の学び合いが発生したと思われる。

さらに、「動詞の活用カルタ」を使用したことにより、学習者の意外な誤解を知ることができたという点も新たな発見であった。例えば「行く」と「来る」は移動するという点で意味が似ているから、同じカ行変格活用だ」という誤解は、教師の立場からはまったく予想できないことであった。このような事実が見えてきたのも、教科書の練習方法とは逆方向からの練習を取り入れたことによる効果だと言えるのではないだろうか。

また、今回の授業実践は帰国子女学生を対象としたものであったが、指導を終えてみた所感としては、この方法は帰国子女学生だけに有効なものではなく、広く国文法の指導の一つとして取り入れることができるのではないかと感じる。一方で、両者が難しいと感じる点や誤解してしまいがちな点に違いがあるかどうかについても興味深い。もし違いがあるとすれば、指導する際の留意点としてまとめることで、今後の国文法指導および帰国子女学生への教育に寄与できることであろう。本実践報告が、今後の国文法の指導を考える上での示唆となれば幸いである。

注

- 1) 山田 (2004:17) では、現代日本語における上一段動詞と下一段動詞は、活用する直前の母音が違うだけであるため、区別をせずにまとめて「一段動詞」と呼んでいる。
- 2) 音便のより詳しい説明については、山田 (2004) p.18を参照されたい。
- 3) たとえば、「なり」という助動詞の表す意味を識別するためには、連体形に接続していれば断定の「なり」、終止形に接続していれば伝聞・推定の「なり」というように、当該動詞の活用形が分かることで正確な意味がつかめる。
- 4) ただし、学習者の理解の度合いによっては、難しいもの（「五段活用」等）から始めるという方法も考えられる。
- 5) 注の(4)と同様に、活用形の出題も、学習者の理解の度合いによっては難しいもの（「未然形」、「連用形」等）から始めるという方法も考えられる。

参考資料

東京書籍編集部編『国文法ワークブック』東京書籍

引用文献

山田敏弘 (2004) 『国語教師が知っておきたい日本語文法』くろしお出版

山室和也 (2006) 「中学校における文法指導に対する意識についての調査・研究～接続語の取り扱いを中心に～」『全国大学国語教育学会発表要旨集』111, pp. 75-78

(すずき ようこ・1999年度本学国文学科卒業生 東京大学日本語教育センター非常勤講師、一橋大学国際教育センター非常勤講師)